

## ウポポイでアイヌ文化を体験しよう

国立アイヌ民族博物館 館長 **佐々木史郎 氏 (高校28期)**

1976年 立高卒。

陸上部だったが、さして足が速かったわけでもなく、全く目立たない生徒だった。

1985年 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。文化人類学を専攻した。国立民族学博物館助手、大阪大学助教授、国立民族学博物館助教授、同教授をへて、

2016年 4月に国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹。民博ではシベリアの先住民族たちの狩猟活動やトナカイ遊牧の研究をしていたが、なぜかアイヌ文化をテーマとする国立博物館創設の指揮を執ることになる

2020年 4月国立アイヌ民族博物館館長。



皆さんは「先住民族」ということばを聞いたことありませんか？国や地域によって事情が異なるので明確な定義はありませんが、おおまかのところ、現在その地域を領土としている国家が領有する以前から住んでいて、しかし、少数派として数々の不利益(土地や資源を奪われたり、不当な差別を受けたりなど)を被ってきた人々を指します。例えば、オーストラリアのアボリジニ、ニュージーランドのマオリ、アメリカ合衆国のネイティブアメリカン(いわゆるアメリカインディアン)、カナダのイヌイト、北欧諸国のサーミ、台湾の「原住民族」などが先住民族として知られています。

しかし、日本にも先住民族がいることはあまり知られていないのではないのでしょうか？でもちゃんといえますよ。北海道を中心に今や日本各地で暮らしているアイヌ民族です。アイヌの人々はかねてより「先住民族」と認めてほしいと政府に要望してきましたが、ようやく2008年に衆参両院での決議で認められ、さらに2019年に施行された「アイヌ施策推進法」という法律に明記されました。

彼らの祖先は非常に古い時代から北海道、サハリン、千島列島、そして本州北部に住んでいました。明治時代に戸籍が作られ、アイヌの人々は日本国民となりましたが、明治政府の開拓政策と同化政策によって土地や資源を奪われ、アイヌ語が使えなくなり、伝統的な儀礼や習慣が禁止されて、今やその貴重な文化が存亡の危機に立たされています。また、社会の少数派として数々の差別を受けてきました。

しかし、昨今の先住民族の権利を擁護する世界的な潮流と、文化的、社会的多様性が社会の活性化を促すという認識が広まって、アイヌの人々の地位向上、生活改善、文化復興が政府の重要な政策となり、「アイヌ施策推進法」の施行とともに、アイヌ文化復興の拠点としてウポポイ(アイヌ語で「大勢で歌うこと」という意味、正式名称は民族共生象徴空間)が北海道の白老町に建設されました。

その中核施設の一つが、現在私が勤めている国立アイヌ民族博物館です。国立博物館としては8番目で、関東より北に設置された初めての国立博物館です。今年4月に開館の予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大のために延期され、7月に何とかオープンにこぎ着けました。



触って学べる展示  
「探求展示テンパテンパ」



国立アイヌ民族博物館建物全景



ウポポイの鳥瞰図 右側中ほどの銀色の屋根の建物が国立アイヌ民族博物館(ウポポイのホームページより)



湖に映る「伝統的コタン」の家々



展示室内部  
樺太アイヌのクマの  
霊送り儀礼  
飾りをつけられたクマ  
とそれをつなぐ杭 →

アイヌ文化には美しい刺繍や木彫などの工芸、歌や舞踊など音楽の他にも、厳しい自然環境を生き抜き、資源を効率よく活用するためのすぐれた知識や技術が詰まっています。国立アイヌ民族博物館は、そのようなアイヌ文化を正しく後世に伝え、広く世界に発信し、さらに時代に合った新しい文化を創造していく拠点として活動しています。新型コロナウイルス感染が終息したら、是非ウポポイを訪れてアイヌ文化に触れてみてください。新しい世界が広がりますよ。